基調講演①

「いっそめいっぱい楽しもう！低炭素社会への取組み」

マエキタヤコ（環境NGOのための広告メディアクリエイティブ「サステナ」代表）

◆温室効果ガスについて

マエキタミヤコと申します。こんばんは。お集まりいただきありがとうございます。様々な年齢層の方が一緒に聞いてくださるということで、最初に運動をしたいと思います。100万人のキャンドルナイトとご紹介文にありました。ありがとうございます。100万人のキャンドルナイトを知っている人、手を挙げて下さい。はい、手をおろして下さい。知らない人、手を挙げて下さい。はい、知らない人の方が多い。では、簡単に説明をしつつ、お話をしていきたいと思います。

低炭素社会を楽しもうというタイトルなのですが、低炭素社会をどうやって楽しむか。低炭素社会という炭素というのはCO_2です。CO_2をあまり出さない生活ってどういう生活か。昔は、CO_2が出ていませんでした。実際には出ているんですよ。息をしていれば出ていますから。でも、人間が吐く息のCO_2というのは、植物が吸って酸素に変えてくれる。生き物が出したり吸ったりしているものというのは、昔も今も、人間が増えたからということはありますが、そういうことを言っているのではない。では、何を言っているかというと、温室効果ガスです。石油や石炭などの化石燃料を燃やして出るものです。ということは、なるべく燃やさない。この燃やさないとはどういうことかというと、そもそも地球というのは、以前は有害な星だった。それが、そこに命が生まれて、植物が有害物質を吸って、地面に埋まって、化石化してくれたので、酸素がたくさんの星になり、生き物が多様化した。それで、人間が今、この地球上に住めるようになったんです。地中にはたくさんのCO_2を吸った植物があってと言うと化石燃料も、もとは植物なのですから、生き物じゃないか。確かにそうです。でもこの地中に埋まった分を掘り出して、空中にまた出しています。地球は、また有害な星に戻りつつあるということなのです。だから、今ある比率を変えない、変えると危険です、と。昔は、生き物が住めなかった有害な星だった。この地球は、かつては有害な星だったということが忘れられてしまっているが故に、何故掘り出して燃やしちゃいけないのということが言われています。有害に戻ってしまうからいけないんです。では、なるべくそれを燃やさずに暮らすにはどうしたらいいか。昔は

燃やしていなかったのです。400年前は燃やしていなかった。150年前でもそれほど燃やしていなかった。そこへ戻ると不便だという話があります。それでは不便ではなく便利で気持ちよく、かつ、燃やさない生活をするにはどうしたらいいのか。それは楽しむことです。

◆社会は可変である

順序が逆なのですが、ではどうやって楽しむかというと、少し講義っぽくなりますが、私のポリシー、「社会は可変である」。どういうことかというと、社会を変えられる、自分も変えられる。変わらないではない。今は特にどんどん変わっています。何が変わっているか。情報ですね。インターネット、ツイッター、フェイスブックもそうですが、今まで隠されていた情報がどんどん出るようになってきた。21世紀はすべてがばれる時代です。原子力発電所の安全神話が崩れました。これは、隠されていた情報が出るようになったということです。昔は一生懸命に隠している人がいましたが、隠している勢力がだんだん弱くなってきた。次はこの出てきた情報をきちんと使わないといけない。私たちのメディアリテラシーが試されている。情報が過多になると、人は鈍感になったり、情報に気がつかなくなったりしてしまいます。それを効率よくキャッチするというのも大事です。

昔は情報が少なかったというか、情報経路が単純だった。今は情報経路が増えています。その増えた情報経路を多角的に利用するというのが大事。だから同じ人からだけ聞くのではなくて、いろいろな人から聞く。セカンドオピニオンをとるというのが大事です。病気もそうですが、ニュースも政治もセカンドオピニオン、いろいろな人から意見を聞いて、自分の意見を考えるというのが大事です。

◆環境12分類について

環境もいろいろな側面があります。これは環境12分類と言いまして、例えばどういうものかといいますと、省エネのエコもあります。省資源もあります。大体、低炭素社会というと、物とエネルギーを少なくすることが目安です。物やエネルギーを少なくして、より楽しくなる。先程社会は可変だという、私のモットーを言いましたが、もう一つのモットーがあって、直接幸せになろう。結局は、幸せになることなのですが、物やエネルギーがたくさん出ないことが幸せか。そんなことはないですね。でも、ないと不自由だ、不幸せだ

と感じることもある。ではどうしたらいいのか。発想の転換であったり、あるいは少しの物やエネルギーでも楽しくなる工夫をする。どのような工夫をみんながしているかということをご紹介していこうと思います。

楽しくなるというのは、今度は心理のことですから、さて自分はどうなったら楽しくなるだろうか。それは、本当に多種多様です。人によってそれぞれ違う。人の数だけ、楽しくなることが違う。それぞれの皆さんが、自分はこれをやると楽しいというところを見つけてもらって、そこで物やエネルギーが少なく、それを楽しめ続けるというものを探してもらう。それが今日の解答だと思います。先に言っちゃいましたけど。

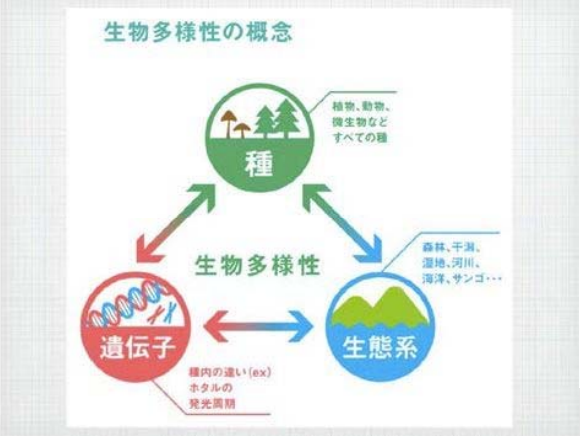
環境12分類、いろいろとあります。省エネ・省資源・温暖化防止・CO_2削減・国民の知る権利・情報アクセス・生物多様性・健康・貧困貿易の解決・平和構築・人間開発。人間開発というのは人権を守るとか、ジェンダー、女性の権利を守るとかいうことです。子供を大事にするとか。そういうことも、ひっくるめて、環境。

何故かというと、しわ寄せがある。ある一つの固まりの人間は恵まれているけれど、ある固まりの人間は虐げられている、いじめられている。そうすると、そこに起こるのは紛争です。あるいは貧困です。貧しさや、あるいは子供のうちに早く死んでしまう。寿命が短い。そういう人たちができてしまう。これはしわ寄せされていると言います。あるいは社会の中で所得が低い。あるいは決断できない状態に置かれている人が、決められたことをやらなきゃいけない。従う、服従関係にある。主従関係ですね。主である人たちと、従う関係、言うことを聞かなきゃいけない人達。この関係にあると、我慢をしなくちゃいけない人達が出る。これはよくない。そこに紛争の可能性があるんです。

世界的に見ると、貧困国というのは、自然を切り売りします。森を伐採したり、魚を乱獲したり。それが自分の首を絞めていることにもなるのですが、世界の首を絞めていることにもなる。当然、そこには利益を得ている人もいますが、虐げられた人たちは苦しくてそこから逃れるために自然を切り売りする。それが環境を破壊していく。なので、そういうことが起こらないように、なるべくしわ寄せの起こらない、均等に、あるいは人権が守られた社会を作らないといけない。それも環境であり、エコであります。

そのための、テーマ構築や人間開発、貧困貿易、この辺が紛争解決関係なのですが、その情報を知らないといけないので、情報にみんながアクセスできる、知る権利という、ここのところで、国際会議があります。今、ちょうどダーバンでCOP17が開かれていますが、みんなで世界で何をしているのか確かめ合い、それをみんなで共有する、シェアするということもエコです。そこでシェアしたもの、それは生物多様性を守らないといけない。CO_2がどの位出ているからみんなで減らそうねということで、CO_2を減らすために省エネをしたり、省資源をしたりするという構図です。

◆生物多様性について



結局は、CO_2がいっぱい出ていても、木が吸ってくれれば問題はないのです。でも同時に木も切っちゃっているから、よくないというのがあります。そこで生物多様性とCO_2削減とどちらが大事なのですかという質問がよく出ます。究極的には生物多様性です。生物多様性がものすごく健康であれば、自然が健康であれば、多少CO_2が出ていても、吸ってくれる。でも、吸ってくれないから困っている。同時に森も切っている、荒廃している。海も、藻が枯れる、あるいはサンゴが枯れる。これがCO_2を吸収できなくなっているという理由でもあります。

気候変動がますます生物多様性を崩している。そのため、生物多様性を守る、自然を守る、生態系が生きる環境を守るというのがとても大事です。

そして生態系サービスというものがあります。基盤サービス、これがCO_2を吸収する。あとは供給サービス。これは、人間は食べ物を全部自然から頂いています。都会で過ごしていると、あたかも人工の中で生きていると言ったりしますが、では人工のものを食べている人はいますか。野菜工場で作っている。まあ、そうかもしれませんが、大もとは野生のものをとってきて、それを飼いならしたものです。自然や野生のものがなければ、人間は生きていけません。そして調整サービス。調整サービスというのは、災害が起こらないように、それから花粉をハチが運んだり、水田というのは、ただ食べ物がそこで生まれるだけではなく、そこから別の生き物も出てくる、あるいは保水力というのもあります。文化的サービスにご注目下さい。これは意外と皆さん忘れがちなのですが、郷土料理だとか、お祭りだとか、それから、旅行に行って、いい景色を見たりする。それも、生物多様性のサービスと呼びます。

◆Ｂセンスについて

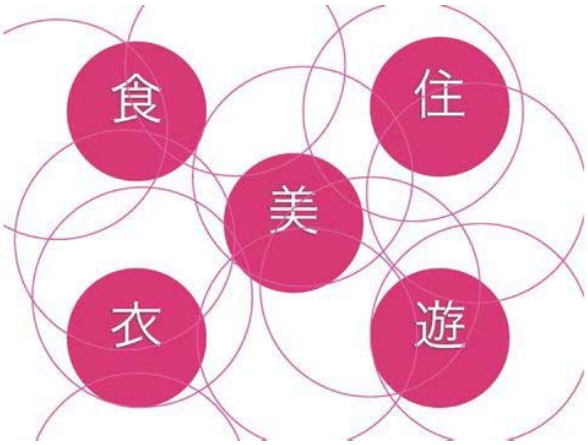
これらを、もっとわかりやすく広めたいというので、「Ｂセンス」という名前をつけました。

Bセンスとは

- 「生物多様性（Ｂｉｏｄｉｖｅｒｓｉｔｙ＝Ｂ）を意識して行動選択する感性（センス）」のことを『Ｂセンス』と命名。
- 日本自然保護協会と環境省の有志が６年前に個人の立場で始めた「自然保護２１会議」から生まれた言葉。わかりにくいといわれる「生物多様性」に関係することがらに気づき、一人一人の行動を通して社会に広めたいと考えて造語したもの。
- 経済効率優先ではなく，もう一つの選択（オールタナティブ）を重視する考え方としての『Ｂ』でもある。

Ｂセンスとはバイオダイバーシティー（biodiversity）、生物多様性のセンスのことです。センスというのは、感じる、感性のことです。

環境省やNGOがもともと作ったものなのですが、エコ活動はいっぱいあります。楽しいエコ活動、低炭素社会を皆さん楽しんでいます。フードマイレージ、オーガニックカフェ、屋上緑化、ミミズコンポスト、それからオーガニックコスメを使っている人もいます。環境教育で子供を連れて山へ行って、鳥や虫を観察している人もいます。緑の選挙、政治家の人になるべくエコになってもらおうと働きかけたり、エコセレブというのもあります。あの芸能人は環境活動をやっているらしいから褒めよう。そういった活動をしている人もいます。あとは、エココンサート。山の中で、オーガニックなものを食べて、山に登ったり、遠足したりしながらコンサートを聞くという野外フェスもあります。それから、有機野菜。農薬を使わないで、野菜を育てて、家庭菜園や、もう少し大きく、それを売って、エコ会社をつくったりしている人達もいる。そういういろいろな関わりに、楽しむ、参加するというのも、一つのエコです。低炭素です。



大きくこう分けると、衣食住はもちろんだけれども、美意識。きれいだなと思う、その自然ってきれいだなと思う気持ちも、低炭素社会を楽しんでいると言えます。あとは遊ぶというのも大事です。

◆天然のかき氷について

具体的に、私の好きなエコ活動を集めてみました。今はもうすぐ冬なのですが、日光では天然の氷を作っています。天然の氷、こんな氷でかき氷を食べたことがあるという人（手を挙げてもらう）。はい。結構いますね。知らなかったという人（手を挙げてもらう）。氷はもちろん天然。天然の氷とはどういうことかと言いますと、冷蔵庫で今は作ります。昔の江戸時代にもかき氷はありました。昔はどうだったかというと、湖に氷が張ります。それを、おがくずの中に入れておく。洞窟や氷室の中におがくずをたくさん置いて、氷を入れて、またおがくずをいっぱい入れておく。それが、保冷剤といいますか、温度が外へ出ない、つまり溶けない。一夏、そこにずっとある。で、殿様が氷を食べたいというと、飛脚がえっほえっほと行って、それを日光から、江戸なのか、さすがに京都は京都の近くで作っていたかもしれませんが、持っていって、それをガリガリとかいて、食べていた。それが天然の昔のかき氷です。

それを今やろうとするとどうなるかというと、まず、きれいな水のお池がないといけません。上に降り積もる落ち葉を払って、大きく育てます。育った後、切って、それを氷室の中に入れておく。それを、夏、この写真は、恵比寿の三越デパートの地下ですが、そこまで持っていってガリガリとかいて売る。黒糖がかかっていて、600円か800円位で、少し高いのですが、これを食べるとどうなるか。これは寄附が入っています。どのような寄附かというと、このかき氷屋さんの氷を作る人たちはNPOです。ほとんど儲けなしで、定年退職したおじいちゃま達が、一生懸命、森の自然保護活動の一環としてやっています。子供達はそのかき氷を食べて、これが天然のかき氷だよ、と教える。こういうものを食べながら、山や川をきれいに保つということが、どれだけ貴重で、たくさんの喜びを人々にお届けするのかということが、とてもおもしろく伝わり、かつ、おいしいので、毎年１回か２回ですが、子供に天然のかき氷を食べさせに連れていきます。

◆日本料理について

昔は日本料理が下手でした。洋食の方が得意だったのですが、目玉焼きを焼いたりソーセージを焼いたり。そんなのは料理じゃないかもしれないですが、だんだん環境活動や自然保護などに取り組んでいくと、気になってくるのが和食です。和食を上手に作れるようになりたい、食材も地産地消の食材で、特に大豆というのは、97%が海外から来ています。国産の大豆は3%で、多くは畜産用で動物が食べて、それが肉になる。

国産の大豆でつくる豆腐で、保存食である高野豆腐というのを、上手に炊けるようになった時はすごくうれしかった。これは低炭素社会への一つの取り組みだなと。皆さんにとって当たり前かもしれませんが。

そこで、日本のおかずという本を買って、チャレンジをしています。

なるべく農薬を使っていない、地産地消、近くでとれたトウモロコシに、近くでとれた地卵などで、茶碗蒸しを作ってみたりします。

売っているもの以外にも、実のなる木を植えようとしています。この写真は、実のところ、親が植えたと思ったら、そんなの植えてないよと言ったので、よそから飛んできたのか、こんなキイチゴが、本当に小さな木なのですが、なります。宝石のような、美しいと思って、毎年写真を撮るのですが、自分の家でなったものを食べるときは、本当に至福の時間です。

◆白川郷について

この茅葺きは白川郷に行った時の写真です。白川郷に行ったことある人（手を挙げてもらう）。いったことない人（手を挙げてもらう）。昔の茅葺き屋根の家がたくさんある所です。是非いらしてみて下さい。こういうところに、ある種、テーマパークのようですが、昔の暮らしが残っています。この写真は、新しく茅を葺いている家があったのです。写っているのは、茅葺きのエレベーター。下にスイッチがついていて、下で茅を載せて、ボタンを押すと、ウイーンと自動で上がっていく。上がっているところの映像が撮れていませんが、昔は200人位上って葺いていました。この家は小さい方ですが、大きい家になると、本当に200人位が上って茅を葺いていた。でも、今はこのエレベーターを開発したので、20人位で茅が葺ける。これはすごい。伝統を伝えていくのも大変だけど、そこに新しいというほど新しくないかもしれませんが、新しい技術がつくられていておもしろいなと思います。

これも白川郷の中なのですが、水路をきちんと残してあって、こういう人の手がきちんと入った植物が、あたかも自然なように生えている。これはまさに、日本のお庭というほどではないが、自然に生えているのです。これが実はジャパニーズガーデンと言われて、イギリスはこれを真似て、イングリッシュガーデンというものをつくった。何に対抗してかというと、フランス型の、木を三角形に切ったり丸に切ったりというのが、イギリス人は、日本のお庭の方がきれいだなと感じたのですね。まさにＢセンスです。それで、日本のこの自然に生えているというところを輸入して、自然じゃなくて手を入れて、実は生やしている。イギリス人もそれを真似て、すごく手を入れて、あたかも自然に生えているかのようなイングリッシュガーデンをつくりました。

◆日本の漆について

他に、日本が輸出しているものは漆。英語でジャパンといいます。もともとは中国から来たものらしいですが、何故か世界中では、漆のことはジャパン。ということは、日本は漆の国ということになります。今は、残念ながら、漆の木が少なくなり、漆をとる職人さんも少なくなり、木を彫って塗る職人さんも少なくなって、絶滅の危機に瀕しています。ですから、漆を使うということは、とても低炭素なんですね。縄文時代から漆はあったわけです。しかも漆の食器は腐らない。水ははじく。美しいまま、100年200年500年1000年、もつものもある。つまり長持ちなわけです。もちろん、使い捨てなどせず、昔の人は、はげたらまた上から塗って何度でも使っています。私は、たまたま、先週、いしかわエコデザインの審査員をやってきたのですが、山中漆器という会社が、エントリーしてきて、給食の器を塗り直していました。すごいですね。当然、木かと思ったら、プラスチックを塗り直している。プラスチックもはげる。はげたら昔は捨てていた。でも、例えそれがプラスチックの容器でも、塗り直して使う。基本が漆器屋なので、おもしろいと思ったけど、できたら漆器で塗り直して欲しいと思いました。学校給食が全部漆器になったら、それだけ需要ができて売れるから、漆の木を山に植えよう、漆職人になろうという若い人達が増えてくれたら、それは低炭素社会へのさらなる一歩だと思います。

水路を見るとわくわくします。エコだなあと思う。そこに生き物がいたり、魚が泳いでいたり、虫がいたりしますとなおさら思う。特に、緑のカーペットと近頃は言いますが、昔はそんなことは言わなかったでしょう。この写真ではアサガオが咲いています。

◆鞆の浦について

ここまでが白川郷でしたが、ここからは鞆の浦になります。広島の鞆の浦を知っている人（手を挙げてもらう）。結構いますね。知らない人（手を挙げてもらう）。知らない人も結構いる。この、まざっているまだら模様というところがいいですね。この風景を見るたびに私が思うのは、私が前に出て話す必要がないのではないかと思う時がある。何故なら、皆さんの中に知識を持っている大勢の人がいる。その人達が話し合えば、私が前で話さなくてもいいのにと思ったりします。でも鞆の浦という提案をするというのが私の役

目かもしれません。鞆の浦だけじゃなくて、他にもいっぱいありますが、鞆の浦を簡単に説明します。宮崎駿監督の『崖の上のポニョ』という大流行した映画があります。あれは鞆の浦を描いた作品です。もともと、その鞆の浦は、開発計画が起きて、古い港があったのですが、港を壊して橋をつくる計画があった。それをやめてほしい、鞆の浦の自然を守りたい。自然といっても港ですから、自然というよりは伝統的な町並み、景観といった方がいいかもしれません。それを守りたいという人達が、宮崎駿さんにお願いをした。すごくいいところなのになくなっちゃうかもしれないから是非見に来て下さい。そうしたら宮崎駿さんが実際に行って、これはすごい所だと。それで、自分で部屋を借りて、そこで暮らしながら描いたのが、『崖の上のポニョ』です。その映画がヒットして、その映画の中でその保護活動は出てこないけれども、そんなにいい所があるんだと、地元の人たちは、改めて自分の故郷に誇りを感じた。そしてその開発計画は今はとまっています。保護することにした。

その港に行ってきました。そして、見つけたのが、梅干し、こんなにいっぱい干されていました。

色も形も違う、でもきっと同じ木からとられたもので、こうやって丁寧に手づくりをしているお家があるんだと思いました。

これはまた、白川郷の写真。気持ちよさそう。気持ちよさそうということを口から出す、そこに行って楽しむということも、一つの活動だと思います。お昼寝したいな。

◆マエキタさんのお家

少し私事で恐縮ですが、これは我が家です。屋上にぽよぽよっと草が生えています。屋上緑化しています。土を３センチだけ盛りました。あんまりたくさん盛ると、重たくなってしまうから。加えて、ミミズをまくことにしました。私としてはミミズをまくというのは当たり前だったのですが、建築家の方に言ってもなかなか理解されない。コンポストしたかった。生ごみを上に持っていって堆肥化させようとしていたのですが、家族の大反対に遭いました。臭い、汚い、飛んだらどうする、落ちたらどうすると、なかなか障害が多いものです。

そして、地上は落ち葉だらけで、だんだん土と道が融合してくるんですよ。どんどんどんどん落ち葉が入ってくると、アスファルトでも草の種が落ちると、そこから草が生える。落ち葉があって、それを掃かないと、どんどんどんどん敷地が道のほうへ伸びていく。おもしろいなと思います。

屋上で友達とたくさんで飲める。上から見るとこんな感じで、ここは屋上なんです。すごい小さな家なのですが、夏は青々と茂る。冬はそれらが枯れるので、そこへお茶菓子を持っていくと、遠足が自分の家の屋上でできる。太陽光パネルを載せるか、それともこの草むらを残すか迷うところです。

私はこのせりふが大好き。『借りぐらしのアリエッティ』で、「私たちは簡単に絶滅したりしないわ」と小さな女の子が言うせりふがあるのですが、それは人間もそう。生き物もそう。絶滅させちゃわないようにしないといけないし、低炭素社会もちゃんとつくらないと、私たちが絶滅しちゃうんです。その危機感を持ちながら、そうならないように楽しむというのが大切。

◆杉玉について

これは祖師ヶ谷大蔵の商店街、三河屋さんという、非常に平坦な名前の酒屋さんがあります。

三河屋さんのお兄さんなのですが、この写真の中に杉玉（スギダマ）が写っています。杉玉をどうやってつくるか知っている人、手を挙げて下さい。どれが杉玉かもわからない人（手を挙げてもらう）。杉玉がどれだかわかるという人（手を挙げてもらう）。杉玉が何のためにあるかわかる人（手を挙げてもらう）。わかった。じゃあ当てちゃおう。富永さん、杉玉は何のためにあるんですか。

富永　何かあったな。新酒ができましたとかそういうお知らせじゃなかったでしたっけ。

マエキタ　そうです。新酒ができましたのお知らせなんですが、何故杉玉が新酒ができましたのお知らせになるのでしょうか。

富永　そこまではわからないですね。

マエキタ　ただ広告のためにつくって、ぶら下げたら新酒の印？

富永　じゃないです。

マエキタ　手を挙げている人がいる。どうぞ。

古田　色が変わるのがサインというふうに理解していたのですが。

マエキタ　それは、どんなときに色が変わるのでしょうか。

古田　緑色の杉玉が、茶色くなったら飲みごろのサイン。

マエキタ　それは、その緑色の杉玉をただぶ

ら下げておくのでしょうか。

古田　そこまで細かいディテールはわからない。

マエキタ　私が聞いた限りでは、杉玉というのは消毒の効果がある。香りづけもあるけど、葉っぱを玉にしてお酒に沈めておくのです。本当かどうか確かめないといけませんね。あんまり皆さんが知らないので、私、間違えたことを言っているのかなって。酒屋の娘じゃないからわからないですが。私が聞いたのは、お酒に漬けて、殺菌、あるいは、発酵の具合をコントロールするのだと言われました。それで、出来た時に引き上げて軒下にぶら下げるから、そろそろお酒が出来てくるぞ、もう杉玉を上げたからということで、清酒ができましたよというサインになると聞きました。間違っていたら教えて下さい。心細くなりました。でもこの方は、自分で杉玉をつくっています。祖師ヶ谷大蔵、小田急線沿線の本当に商店街にある、普通のお酒屋さんなのですが、この人は山に行ってつくっている。まだまだそういう伝統的な食文化がちゃんと残っているんだなと思いました。

ニューヨークにあるカフェ。ここがおもしろいのは、最初はオーガニックカフェじゃなかった。質問の多いお客さんがカフェをエコシフトしました。

◆ご近所が作るカフェ

それは、日本だけではありません。これは、

この野菜は無農薬なの、このヨーグルトは

オーガニックなの、どんな牛からとれたの、このオレンジは有機栽培なの。そういう質問を周りに住んでいる住民の人達がしたそうです。そうしたらどうなったかというと、最初は面倒くさそうに店員さんが答えていたのですが、そのうちに、そういうのを使うか、使わないとお客さんが来てくれないのかと期待されている、失望させちゃいけないというので、オーガニックメニューが増えました。

そのうちに、聞かれると、これは無農薬なんですよ、これは地産地消です、近くの川でとれましたということを言うようになりました。こうやって周りの住民たちが、どんどん質問することで、おもしろいですね、責めるんじゃないんですよ、質問をするのです。聞くというのは、親切でもある。だからどんどん聞いてあげると、向こうは、あっ、そうかそうやった方がいいのかなとさりげなく思う。そして、どんどんエコになっていく。お店もエコ。お店を育てるのはお客さん。だから、それが一歩なんですね。どんなところでもいいんです。どんなところからでも始められる。エコじゃないカフェに行く。そこで、これはオーガニック？これは無農薬？と聞くことで、そのお店に一つ影響を与えられる。

◆再びマエキタさんのお家

我が家の夏の風景で屋上です。生ごみを捨てているので、種からカボチャが生えています。あるとき、こんな小さなメロンがなっていました。もったいなくて食べませんでしたが、かわいい、こんな小さいのにちゃんと一人前に網目まで入っていました。たった３センチの土なんだけれども、だんだん植物の繊維で、ふかふかになって、いずれはそこに木が生える、そこに鳥がやってくる。そこに果物がなる。そんな家になったらいいなと。長期計画なんです。あと30年後位をご期待下さいみたいな感じです。何をやっても、低炭素社会というのは楽しめると思いますという、そんなお話でした。

もうお時間になってしまったので、ここまでにしようかなと思います。

◆100万人のキャンドルナイトについて

100万人のキャンドルナイトの話をするのを忘れていました。少しだけ説明すると、自発性・一体感の多様性の環境文化運動です。100万人のキャンドルナイトというのは、夏至と冬至の日の８時から10時までの２時間、電気を消して、スローな夜を楽しもうというスローガンで始めています。

これが１年目につくったポスターとマッチ箱とはがき。

２年目は、まだ無名だった宮崎あおいちゃん（女優）が出てくれました。スローガンが、電気を消してスローな夜を、なんですね。スローをはやらせたいからという呼びかけ人達と一緒につくりました。毎年、１枚だけ写真を、７年間撮っていました。最初の年には、写真を撮るお金がなかったので、自分たちのポケットマネーを５万円ずつ出して、それでマッチ箱とかを作ったんですが、２年目はあおいちゃんに出てもらいました。

３年目が、湯川潮音ちゃん（シンガーソングライター）と、東野翠れんちゃん（写真家）。

４年目、木村綾子ちゃん（作家）。

５年目、酒井景都ちゃん（デザイナー）。

６年目、子供達。

７年目、泡瀬干潟。これはキャンドルナイトというローソクを動かして、キャンドルナイトと書いてみるというようなことをやっていて、これで若い人達を取り込もう、いろんな世代の人達にと。

もともとは脱原発運動なのですが、原子力に頼らない世界をつくるということを、原発推進をしている人達とも話し合おう。だから、対立巻き込み型といって、脱原発の人も、原発推進の人も、とにかく８時から10時まで、一緒に電気を消そうよというイベントです。

今年は福島原発事故が起きたので、100万人のキャンドルナイトと同時に、エネシフジャパンという活動も始めました。これは、低炭素社会を楽しもうと言いますか、原発にも、石油・石炭・天然ガスにも頼らない日本をつくろうという超党派議員と国民の勉強会を毎週やっています。

これでキャンドルナイトの説明をしました。